平成23年11月9日

岩手県立二戸病院の概要

院長　　鈴木　彰

1、位置、地域

病院の概要を説明いたします。当院は岩手県内陸北部の二戸市にあり、医療圏は二戸市を中心とする1市2町1村（市町村合併前は1市3町1村で自治体の配列が二戸市を中心にしてW型になる事よりカシオペア連邦と呼ばれています）と青森県南部の2町の一部をカバーしており、対象人口は約8万人です。

この地域の特徴としては、病院が3つありますがいずれも県立病院で、当院はその中で中核病院の位置にあります。また当地域の医師会は会員数82名で、そのうち、県立病院の勤務医が55名を数え、勤務医が地域の医師会の活動や地域医療を支えています。

医師はじめ医療従事者、医療施設数ともに県平均を下回り、地域較差の顕著な地域です。特に医師数は全国平均の半数です。

2、病院の特徴

次に当院の事について述べたいと思います。

当院は平成16年5月に現在地に移転新築いたしました。

一般病床　279床、結核　10床、計289床で運営しておりますが、呼吸器科の常勤医師が不在になった時点から結核の10床はほとんど使用されておりません。

診療機能は18科を標榜し、平成20年から入院を中心に電子カルテを導入し、平成21年からDPC病院になっております。24年の1月から外来部門も電子カルテに移行する予定でおります。その中で、救急医療から訪問診療、在宅緩和ケアまで幅広く診療活動を行っており、中規模ながらこの圏域の地域密着型中核病院として機能しております。

また、九戸村に小規模の県立病院があったのですが、無床化され当院付属の診療所となり、医師は2名いますが、内科・外科を中心に当院から応援に行って診療にあっています。

次に、教育面についてお話します。まず臨床研修指定病院になっております。岩手県の臨床研修は岩手医大を含めた臨床研修指定病院がイーハートーブ臨床研修病院群を形成し、お互い自由に研修できるようになっています。実際、岩手医大の研修医が小児科の研修に来たり、久慈から産婦人科の研修に来たりしています。そして、岩手医科大学の地域医療研修協力病院であり、3年生や6年生の医学生が実習にきています。さらに二戸高等看護学院の教育実習病院であり、県立大学看護学部助産師学科、岩手看護短期大学助産学科の実習を引き受けております。研修医、医学生、看護学生の教育にも力を注いでおります。

また、今回大震災、大津波がありましたが、当院は県内でも数少ない免震構造を持つ災害拠点病院となっています。（当会議室にも酸素、吸引のパイピングなされており、今回も在宅酸素療法の患者さんが来院した時にここで対応しております。）DMATは2チーム編成可能で、今回1チームは院内対応、もう1チームは被災地である久慈、野田、宮古、山田等に出動し、診療や搬送に従事しております。残念ながら4月の人事異動でロジが一人転勤し、欠員となっています。講習を受け、資格を取得してもらうことにしています。

次に、病院の特徴を述べたいと思います。

第1に、なんといってもこの圏域の救急医療の大半を引き受けていることです。昨年度は一日平均4から5台の救急車を受け入れ、救急車来院の入院率は47%に上ります。救急隊とはメディカルコントロール等の事業や救急救命士の実習事業や当院の研

修医の救急車同乗実習を通じ良好な関係を保っております。研修医の救急車同乗実習とは、救急車および救急クルーに病院で待機していただき、救急要請を受けて救急の研修に回った研修医が救急車に同乗し、患者さんに付き添って搬送するという内容です。

さて、2番目として地域医師会はじめ近隣の医療機関との連携の良さがあります。地域医療分化推進事業でかかりつけ医機能を持つ診療所や小規模病院との役割分担、円滑な患者紹介といった活動を行い患者さんの利便を図っております。昨年度の紹介率は約24%、逆紹介率は約 14%でした。小さな医師会ですので顔の見える関係が構築され、非常に良い関係が保たれております。

さらに、放射線科の機器（CT、MRI、乳房撮影等）を地域においてオープンとしどこの医療機関でも使用できるようにしております。

また、昨年からカシオペア地域医療福祉連携研究会を病院内のMSW、事務を中心とした多職種のメンバーと地域のケアマネさんや施設の方々と立ち上げ、顔の見える関係を作りつつ、様々な協議、研修を行い、医療・福祉・介護での情報の一元化・標準化、機能分担を図り、徐々に成果を上げてきています。さらに、今年からパス部門を立ち上げ、地域連携パスの方向に動き出しております。これの状況を踏まえ、病院としてさらに地域医療・福祉連携室に退院調整看護師を配し、機能の強化、拡充を図っています。

3番目として当院はガン拠点病院の認定を受けております。ガン拠点病院としては規模が小さく、この規模でなっているところは全国的に見ても少ないと思われます。院内での研修会のみならず、地域の医師の緩和医療の講習会を実施したり、TVシステムを病院外とつなぎTVカンファランスをしたり、一般の方々へ公開講座で情報発信したりしています。

またガンの相談事業を行うとともに、緩和ケア認定看護師を中心に在宅緩和ケアを病院全体で行っており、徐々に患者さんも増え成果も上がってきています。

4番目として県内で最初に診療科、看護科、栄養管理室、リハビリテーション科などが共同でNSTを立ち上げ、栄養改善、褥瘡防止等に取り組み、平成16年には日本静脈経腸栄養学会認定・NST稼働施設として認定を受け、平成17年には岩手県医療局県営医療貢献賞を受賞しました。その後、さらに地域の歯科医師会と連携し口腔ケアのラウンドを実施したり、他院から呼吸療法の看護師さんを招き呼吸器ケアのラウンドをしたり、当院の皮膚排泄認定看護師を中心に褥瘡のラウンドを行っております。

5番目は、医師はじめ医療従事者不足の当圏域ならではの活動として、他の小規模病院への診療応援が多いことが挙げられます。当院も決して人的余裕があるわけではありませんが、中核病院としてこの地域全体を支えるという考え方から、医師のみならず薬剤師、検査技師、放射線技師、ME、MSWと多岐にわたり応援をおこなっております。

また、これは連携に入るかもしれませんが、県立病院3つある中で、昨年まで当院に外科医は5人、他の2つの病院に一人ずつしかいませんでした。大きな外科手術などは当院に集め、当院のみで行い、落ち着いたらそれぞれの病院に返すこととし、手術は紹介元の先生が来て一緒に手術に入る事を行っております。（今年になり1つの病院から外科の常勤が居なくなり、さらに厳しい状態となっております。）

さらに産婦人科は医師数が少ないことより圏域外の久慈病院との間で分担し、当院にハイリスク・重症の患者さんを集め、手術・治療後落ち着いたら久慈病院に戻し、医師もそれに伴う体制とし（二戸3人、久慈一人）、ローテイションを組んで診療しております。そのような中で、今年の4月から地域周産期母子医療センターの認定を受けてお

ります。

6番目として住民の方々の声を受け取るために、当院はモニター制度を導入し、病院モニターの方々から常時ご意見をいただくようにしております。また院内各所に投書箱（ふれあいポスト）を設け有効に活用しております。投書にはほぼすべてに2週間以内に回答し、よく目立つ玄関に目の高さで見やすく掲示しております。前は月に20通ほどの投書がありましたが、回答を続けていくうちに月5通程度に減少してきています。

病院からの情報発信としてはホームページ、広報「ざしきわらし」、市民公開講座、さらに市の広報や医師会報、カシオペアFMなども利用しております。

さて病院の運営は、院長・副院長・医局長・総看護師長・事務局長・事務局次長・医事・総務の課長よりなる管理会議（週1回）と各部署の責任者など40名で構成される運営会議を中心として行われています。各委員会も定期的に行われ、カンファランスもできるだけすべての職種を対象とするように工夫しておりますし、その一部は外部の関係者にも開放しております。

経営面は、平成9年に全国自治体病院開設者協議会並びに全国自治体病院協議会の両会長表彰を受賞し、平成10年には自治体立優良病院自治大臣表彰を受賞しております。最近は単年度でやや赤字が続いておりますが、平成22年度までの累積では16億5千万の黒字です。

最後のなりましたが、当院は地域において顔の見える関係を保ち、地域を支えるとともに、医療の原則である安全で安心な、そして環境にやさしく、信頼される病院を目指しております。今回、サーベイヤーの皆様から、第三者としての適性な審査をいただくことは、当院が今後より良い病院となるための良い機会になるものと考えております。

当院のあらゆる分野を見ていただき、ご指導いただければ幸いと思っております。

よろしくお願いいたします。

（平成23年11月現在）